

体力測定結果のフィードバックと保護者喚起

勝谷 晋也¹⁾・中野 貴博²⁾

はじめに

われわれは現在、愛知県瀬戸市教育委員会、子ども未来課、公立小学校および保育所そして、名古屋学院大学が一体となって子ども達の運動促進に関するプロジェクトを展開している。幼児を対象にスタートした活動だが、現在は児童期、特に低学年児童にその範囲を拡げて活動を行っている。単なる委員会組織ではなく、実際に保育所や小学校での運動促進の共同や計画の立案、保護者や保育士向けの発信、講演会など広く運動促進を充実させるための活動を展開している（図1）。本稿では、その中で特に小学校と大学が一体となって取り組んできた活動の一部に関して報告する。

まず、対象としたのは小学校2年生児童である。幼児からの連携を考えて1年生も検討したが、小学校への慣れなどを考慮して今回は2年生を対象とした。近年の体力低下問題解消のためにさまざまな運動要素の経験を盛り込むことに加えて、体力・運動能力の個人差がかなり大きいことを受けて、授業内でスモールステップによる指導環境を構築するなどの改善に取り組んでいる。また、体育授業の充実に加えて、5月に全8種目の新体力テストを大学の補助のもと実施することで、子ども達および保護者や小学校教員への意識喚起を行っている。以降の節では、新体力テストの実施からフィードバック、保護者の意識喚起、そして、

体育授業の共同による利点と課題。最後に、小学校独自の取り組みと今後の展開について示していく。

1. 新体力テストの共同と保護者へのフィードバック

最初に従来、同市が行ってきた新体力テストについて説明する。従来、瀬戸市では低学年においては握力や50m走などの限られた種目のみを実施していた。実施の手間や低学年にはできないのではないかなどといった懸念から、同様の現状の市町村も多いのではないかと思う。しかしながら、より正確に子ども達の体力を評価するためには全8種目の実施が望ましい。また、多様な運動体験が必要な時期の児童に対し、各運動要素の実態を測定しておくことは、以降の取り組みのためのよい資料となる。そこで、専門機関である大学の補助を活用して全8種目を実施し、さらに測定結果をもとに個人票を作成することで今後の資料として活用することにした。

実際に実施してみて感じたことは、子ども達にとっては新体力テストの実施自体がイベントであり、測られることに対する抵抗はほとんど見られなかった。また、実施に関しても大きな問題なく行うことができ、教材としても上手に活用すべきということを感じた。個々人の体力の特徴を教師や保護者が理解するためにも重要な機会である。また、教育現場においては得られたデータを集計したり、活用したりするには時間的制約も多い上に、そのノウハウが確立されているとは言いがた

筆者：1) 瀬戸市立下品野小学校

2) 名古屋学院大学スポーツ健康学部

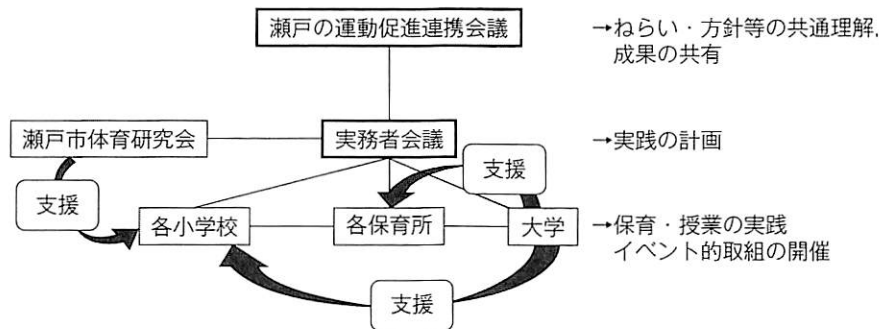


図 1 瀬戸市における運動促進の連携

体力測定結果と評価				名前	学年	性別	測定日
					2 年生	男子	2017年5月12日
小学校				身長	体重	全国の学年平均身長・体重	
				124.0 cm	24.8 kg	122.5cm, 24kg	

基本項目	記録	学校平均	全国平均
1. 握力 (筋力)	右: 14 kg 左: 13 kg 平均: 28 kg	16.5 kg	11.04 kg
2. 上体起こし (筋持久力)	28 回	16.5 回	14.16 回
3. 長座体前屈 (柔軟性)	24 cm	24.2 cm	27.98 cm
4. 反復横とび (敏捷性)	35 回	24.3 回	31.45 回
5. 20mシャトルラン (全身持久力)	48 回	26.8 回	28.41 回
6. 50m走	9.4 秒	10.7 秒	10.7 秒
7. 立ち幅跳び (筋跳力)	150 cm	115.7 cm	124.3 cm
8. ソフトボール投げ	17 m	11.8 m	12.01 m

あなたの体力チャート(点)

<p>総合得点</p> <p style="text-align: center; font-size: 24px;">49 点</p> <p>このちょうしでさらなる体力アップをめざし、きろくをのぼしていきましょう。</p>	<p>筋力について: もっともっとちからを使って強くなるようにがんばりましょう。</p> <p>筋持久力について: なわとびなどをたくさんやって、一番めざしましょう。</p> <p>柔軟性について: ストレッチなどをするじかんにふやすようにしましょう。</p> <p>敏捷性について: おにごっこなどのうんどうで、もっと、す早く動けるようにしましょう。</p> <p>全身持久力について: じきゅう走がもっともっと早く走れるようにがんばりましょう。</p> <p>筋跳力について: タイアとびなどのうんどうをリズムよく、れんぞくでできるようにがんばりましょう。</p>
--	--

図 2 体力テスト個人票サンプル

い。中学生以降では、安価で個人票を作成するサービスを行う業者も存在するが、小学校、特に低学年では希である。しかしながら、今回はこの部分を専門の大学と共同することで補うことが可能となった。測定結果をすべて個人票形式にまとめ、測定結果に応じて普段の運動や遊びに関するコメントを付した(図2)。これを子ども達に配布することで立派な教材となるし、さらに保護者にも見ていただくことで、子ども達の運動、体力

への意識を喚起することができる(図3)。同市では一部の公立保育所でも同様の活動を行っているが、保護者からの関心はきわめて高いのが現状である。保護者の意識が高まり、さまざまな活動への参加や要望が増えてくれば、子ども達にとって最も心強いバックアップとなることは間違いない。もちろん、すべての個人票は電子データ化し、資料として学校とも共有可能な状態にしてあり、担任教員も子ども達の体力・運動能力の状況を適

宜確認できる。単純なことだが、このような体力・運動能力の把握が子ども達への声かけや指導に際し、その適切性を高めてくれると思われる。

2. 調査実施による保護者の子どもの体力・身体活動への意識向上

次に、新体力テスト実施後に行った保護者へのアンケート調査について紹介する。新体力テスト実施後に個人票を作成し、子ども達および保護者にフィードバックを行っているのは前述のとおりである。実は、その後に保護者に対し簡単なアンケート調査を実施している。調査内容は、主に子どもの運動に対する実態と充足感、そして、新体力テストの結果をみて過大評価をしていたか過小評価をしていたかの2点である。調査を計画した目的は2点ある。1点目は、再度、保護者に個人票を確認していただき、子ども達の体力に目を向

けてもらうこと。2点目は、今の保護者が自分達の子どもの体力・運動能力に対しどのようなとらえ方をしているかを学校側が把握し、今後の活動への資料とすることである。

1点目の目的に関しては、調査に回答をいただいている時点で、ある程度は達成されたものと思われる。2点目に関しては、結果の集計・分析が必要であった。この点は、大学と共同することで円滑に行うことができた。表1に新体力テスト結果と子どもの体力に対する保護者の過大評価と過小評価の関係をまとめた。流石にA評価であった児童の保護者で体力がなかったと感じている保護者はみられないが、B評価の児童であっても、実に44.4%の保護者が「少し体力がなかった」と回答しており、自分の子どもの体力を過大評価していたことがわかる。また、D評価やE評価になるとこの傾向はさらに強くなっていた。全体として、「とても体力がなかった」「少し体力がなかった」といった過大評価傾向の保護者が半分近くみられ、一方で過小評価傾向の保護者は15%程度しか見られなかった。この結果は、今の保護者の多くが子どもの体力を過大評価する傾向にあり、問題意識が薄い恐れがあることを示唆している。

このような実態を学校側と共有することで、学校側が真剣に子ども達の体力のことを考えることに加え、保護者の理解も促していかなければならないことを再確認した。今回得られた結果は、今後の学校教育現場での活動計画立案のうえで重要な資料であり、時折、このような調査や測定を実施することで、有効な資料を蓄積することが、より効果的な計画立案には欠かせないと思われる。

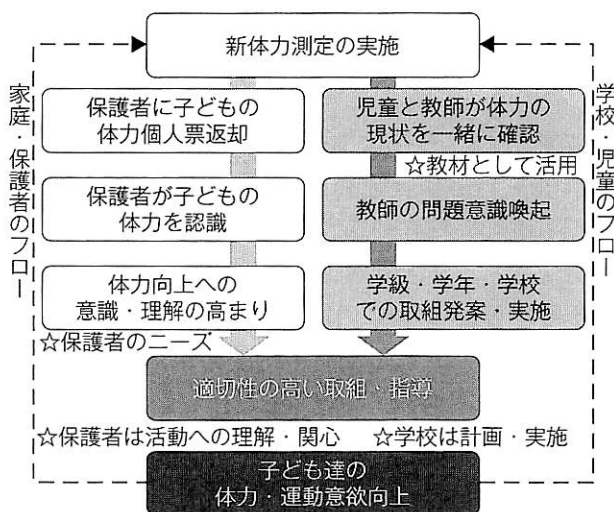


図3 新体力テスト実施から体力・運動意欲向上までのフロー

表1 新体力テストの結果と子どもの体力に対する保護者の過大評価と過小評価の関係

評価	お子様の新体力テストの結果を見る前と見た後でどのように感じましたか？					合計
	とても体力がなかった	少し体力がなかった	思った通りだった	少し体力があった	とても体力があった	
A	0.0%	0.0%	75.0%	0.0%	25.0%	100%
B	0.0%	44.4%	44.4%	0.0%	11.1%	100%
C	5.6%	50.0%	22.2%	22.2%	0.0%	100%
D	35.7%	21.4%	35.7%	7.1%	0.0%	100%
E	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	100%
合計	14.9%	34.0%	36.2%	10.6%	4.3%	100%

3. 体育授業における共同

続いて、体育授業内で学校教育現場と大学とが共同した内容について紹介する。ここまで示してきたとおり、われわれは新体力テストの実施とフィードバック、調査等を通して、子ども達の実態と問題点に関して多少の示唆を得ている。もちろん、新体力テスト自体も体育授業内での活動ではあるが、ここでは得られた示唆から着想した体育授業内での共同の内容と考え方を示したいと思う。

まず、対象が2年生ということもあり、授業の運営は全面的に担任教員にお願いすることとし、あくまで大学は、過去の事例や文献等の資料と前述の示唆に基づきながら提案・補助を行うこととした。ここで、第一に提案された内容は、子ども達の体力や運動経験の差が予想以上に大きいという点を鑑み、授業内で段階的な取り組み、つまり、スモールステップによる学習を可能にしようというものである。本来の体育授業において、担任一人で実施することは難しいと思われるが、大学教員および学生が協力することで複数の課題を同時進行できる環境設定を行った。環境設定に際しては、まず、担任教員が子ども達の実態を考慮しながら教育課程に基づき中心課題を設定する。そのうえで、大学が有する多くの資料や人的資源の活用を考慮して、中心課題にたどり着く前の初歩の段階から発展的段階までの取り組み課題を提案する。そのうえで、子ども達の体力実態という重要な資料に基づき、最終的に実現可能な指導計画へと導いた。このような活動を繰り返すことで、われわれが正確に知り得た子ども達の体力レベルに見合った取り組みを1つの授業内で段階的に展開できるようにすることができた。これにより、子ども達のすべてが、常に自分に合った水準の課題に挑戦している状況を構築できた。

これ以外にもわれわれは調査結果を通して、保護者が体育授業だけでは運動が足りていないと感じる傾向にあるという情報を得ていた。そのため、上記のように子ども達みんなが常に動いているような環境の構築、さらには、準備運動段階で多様な動作を含んだサーキット的活動を取り入れるなども行っている。これらは、いずれも調査や

測定、または小学校教員と大学とが話し合いを重ねる中で得られた多くの資料や情報から着想されたものである。このような活動を継続していくことで、少しずつではあるが保護者の意識も喚起され、大学や地域が開催するさまざまな運動イベントへの参加者数も増加してきているという現象がみられている。

4. 小学校独自の体力向上の取り組み

今から紹介する2つの取り組みは、今回の体力測定や体育の授業の共同を行う前から実践しているものである。大学と共同したことにより、子ども達の姿に変化もみられたので、その点も含めて述べたい。

まず初めに、全校で取り組んでいる活動として、「元気いっぱい運動」がある。これは、2学期と3学期にそれぞれ、8日間から10日間程、業前と休み時間に行っている運動である。2学期は縄跳びを行っており、異学年でグループをつくり大縄跳びをしたり、個人で短縄跳びのさまざまな技に挑戦したりしている。共同による授業で縄跳びにも取り組んだことにより技能の向上がみられたので、「元気いっぱい運動」に例年以上に意欲的に参加し、難しい技に挑戦する子ども達が増えることが期待される。3学期は寒さに負けず身体を動かすことを目的にマラソンに取り組んでいる。各学年で目標を設定し、業前の時間帯に運動場を走っている。休み時間や体育授業でも走る姿がみられ、3学期は走ることを中心に体力向上を進めている。今後も、授業と「元気いっぱい運動」をうまく関連付け、子ども達の体力と運動への意欲の向上を図っていきたいと考えている。

次に、学校の特色の1つである芝生広場を紹介する。運動場と校舎の間に、縦20m横30m程の芝生広場が2面ある。そこは、はだしで遊びまわることのできる子ども達の人気スポットとなっている。子ども達は、鬼ごっこをしたり、芝生の上を転がったりして思い思いに楽しんでいる。また、体育授業でも活用されており、運動会前には自発的に芝生で練習する姿もみられる。小学校では、日常的に身体を動かすことをねらいに、休み時間は運動場に出て遊ぶことを推奨している。

サッカーやドッジボールで遊ぶこととあわせて、芝生での遊びが運動につながっている。特に保育所から実践しているこの事業のおかげで、抵抗なく屋外に出ていく子ども達が多い。また、小学校は保育所と隣接しているため、最近では、園児が芝生に遊びに来て、小学生と一緒に鬼ごっこをしている姿もみられるようになった。今年度はドッジビーなどの道具も新たに購入し、さらなる屋外での遊びが充実するよう努めている。

5. 共同による利点と今後への期待

今回の大学との共同は、小学校にとって多くの利点があった。先述した内容と重複するものもあるが、小学校現場から感じた利点を2点あげたい。

1点目は授業の充実である。担任1人では不可能な多様な運動メニューが用意され、スモールステップで目標を目指すことができる授業を展開することができた。加えて、教員や多くの学生の支援により、個別に指導する機会が増加した。その結果、子ども達の技能面の向上はいうまでもなく、楽しみながらできる喜びを感じることができ、意欲の向上がみられた。また、担任にとっては指導力の向上にもつながった。専門性を有した大学の先生からの助言により、今までの実践を見直すことができたと同時に、新たな指導法も身につけることができる機会となった。さらには、多くの教員や学生で子ども達を見守ることができ、特に水泳などでは、安全確保にもつながった。

2点目として、保護者の運動への意識が高まったことがある。新体力テストの結果を保護者に知らせたことで、子ども達の体力を客観的に知ることができたことが大きな要因といえる。また、小学校の教職員と保護者向けに、授業で共同している大学の教員が運動と生活習慣についての講演を行い、運動の重要性を周知したことも、意識向上

につながったと思われる。

今後は教育委員会が中心となり、保育所や中学校とのさらなる連携を推進したい。さらに現在は2年生のみの実践となっているが、他の学年での共同に加え、保育所から中学校まで切れ目のない発達段階に応じた取り組みが望まれる。そのため1つの方策として、昨年度、教育委員会がこの取り組みをもとに瀬戸の運動促進プログラム(EPSS)を作成し、瀬戸市の教員に周知するとともに、ポスターとして市内各小校へ配布した。昨年度は「投げる」運動で、今年度は他の運動も作成する予定である。このように、最初は1校や1学年のみでの実践が他の学年や小学校にも広がり、瀬戸市全体で運動に対する意識が高まり、身体を動かすことが好きな子ども達が増えることを期待したい。

6. まとめ

シンプルな新体力テストの実施から始まった活動であるが、それを有効な資料とし、さまざまな問題意識を共有することで、それ以外のデータや取り組み、これまでの経験とも結びついてきていると思われる。教育現場の経験や子ども達を見る目、そして、大学等の研究機関の専門的分析や資料の提示、提案を融合してできることは多いように思う。単純なことからであっても丁寧に分析し、お互いが特色を活かして有効な意見を出し合い、資料として共有することで、子ども達の育みに有効な活動や成果を今後も創造していけるものと思われる。

付 記

本稿は、瀬戸市大学コンソーシアムせと「新しい文化創造プロジェクト」および名古屋学院大学研究助成事業の助成を受けて行われた活動をもとに記した。